

京劇の化粧にみる

中国伝統の身体観

明治大学 富 燦霞

目的と方法

近代以降中国舞踊再発展の基礎である戯曲は、伝統に造詣の深い文人が執筆し、民間技芸を身に付けた役者が演じ、それを観客が批評するという、長い年月にわたって続く三者の相互関係を通じて中国独自の型を形成してきた。本研究は、戯曲の身体技法・表現から中国舞踊における伝統的身体観を探り、構築するものである。本発表では、中医学（伝統中国医学）の身体観の見地から、京劇の化粧について以下のように考察を行なった。

1. 中医学における基本的な身体の見方と病理の特徴を明らかにした。2. 京劇の化粧の様式より検討し、人物表現の特徴を見出した。3. 1.と2.を比較検討し、伝統的身体観との関係を明らかにした。

結果と考察

中医学の身体観と京劇の化粧との対照表を参照

1. 中医学の身体観

気を中心とする陰陽五行の考え方は、哲学・芸術など様々な中国伝統文化に共通する思想背景となっている。二千年以上の臨床経験を積み重ねてきた中医学では、気・血を身体の基本要素とし、それらの体内における機能と循環が健康を左右すると考える。陰陽五行のバランスが良い中庸状態であれば平常で理想的な健康状態とみなし、逆に気・血の機能と循環の失調を病態とみなす。具体的には、診断を導く考え方において、機能と物質・部分と全体・表裏と経絡システム等を陰陽の対峙と循環調和関係に、臓腑及び精神を五行とその相生相剋関係に当て、様々な理論を生み出して治病の依拠としている。

体内や精神の状態は、平常(表: 部分)、過剰または不足(表: 部分)の三つのカテゴリーに分けられる。それぞれに対応する体表の状態(体表の色、臭い、温度、声、形状など)が決まっており、それらが診断に重要な情報となっている。また、五行の特性に沿って、異なる働きを持つ先天的な微細の精神(こころ)が五臓に宿り、その存在状態が後天的な感情を司ると考えるが、五臓は各々固有の色(五色)とも対応しており、表現される精神や感情は色と固い結びつきを持つ。

2. 京劇の化粧

京劇の化粧は、俊扮と臉譜の二種に大別される。俊扮は赤・白・黒の三色だけで五官端麗な容姿を表現する化粧で、役や役者の個性・性別・年齢等

中医学の身体観と京劇の化粧との対照表

作成/富燦霞

中医学の身体観	陰陽		五行								
	健康	陰	相生相剋図 臓・腑・色は対応している								
	美・過剰・偏り	虚・不足・偏り	属性	木	火	土	金	水			
	平常・普通・中庸		五色	青	赤	黄	白	黒			
			過剰	衝動無謀	闘争心強	嫉妬利己	固執独善	冷酷剛直			
			精神	魂	神	意	魄	志			
			感情	怒	喜	思	悲	恐			
			不足	救済急情	脆弱軟弱	躊躇不振	優柔不断	種廃不安			
京劇の化粧	俊扮		人物像・容貌								
	善・悪・帝王・貧民・神妖	中庸・平常	社会の中に融け込める人物 容姿端麗の人間 一極な理想顔								
	臉譜	偏り(過剰/不足)	社会の中で浮いている人物 人間離れた個性が突出 多様で異常な顔								
			色・性格傾向	赤	白	黒	赤	白	黒		
				活動意欲	決断魄力	冷静沈着	衝動無謀	忠義忠誠	凶悪策士	頑固独善	冷酷剛直

の千差万別を排除した画一の容貌に仕上げる。一方臉譜は主に男性役の化粧であって、役により異なり多様である。鮮やかな色で華麗な図案を描き、人間離れた顔を作る。俊扮と臉譜はいずれも、あらゆる立場や属性の役に使われ、その使い分けは善悪や人間か否かといったことにはよらない。

3. 京劇の化粧にみる中国伝統の身体観

役の性格と化粧の色使いから、俊扮は社会通念上「普通」といえる人物に、臉譜は激しい気性や徹底的な忠誠心等「普通」から逸脱した部分を持つ人物にそれぞれ用いられていることが判明した。俊扮は分別を表す白・黒と、血の気を表す赤(表: 部分)で、役に関らず同一の美しい顔を描く。一方臉譜ではその役の「普通でない」個性を表す色(表: 部分)が広い面積を占め、役ごとに独特で人間離れた顔を描く。このように、俊扮と臉譜の関係には、中庸を理想とする中国伝統の身体観が反映されていると考えられる。

結び

京劇の化粧の形式からは、善悪や人間・非人間といった二項対立ではなく、理想である中庸が中心にあり、それに対して様々な偏り(過剰や不足)があるという構造が読み取れる。これに加え、心身一体で表裏相通ずる(内面が体表に表れる)、性格と色が関連するという身体観も、陰陽五行から派生した中医学のそれを体現しているといえることができる。

謝辞 本研究はJSPS 科研費(JP19K00229)の助成を受けたものである。また身体観の検討は、中医師の陳峙嘉氏及び京劇俳優の張春祥氏の多大なご協力により成し得たことであり、謹んで感謝の意を申し上げます。